

## 【2】高等部の生徒の発達的特徴と、からだづくりの目標

最近、障害児教育の実践において、「生活年齢」の重みが重視されている。また、本校高等部においても、生徒を「青年期にさしかかった人格の形成」という視点でみると、たしかに成長の中で培った生活経験の蓄積を経て、青年期としての発達的特徴をはしばしに発見することができるようになった。それは、要約すると次のような点である。

- (1) 急激な身体的発達の伸びと第二次性徴の発現がみられる——大人の身体になる（身体的・性的成熟）
- (2) 感覚、表象、ことば、道具の操作力、記号操作力といった認知能力の萌芽が見られる。——生活経験の蓄積による自己調整力の増大、自己調整力の育ちにとともなう集中力、持続力の高まり
- (3) 自己確認・自己評価の力が育ち、いやなことを拒否したり、楽しいこと、関心のある活動に意欲的に取り組もうとする。

このような「青年期の発達的特徴」に着目し、主体的・意欲的に活動させる機会を保障することが、この時期のからだづくりの基本であると考えた。また、「主体性」の育ちは、自治能力や知的能力を育てることで期待できると考え、児童生徒会活動や教科学習を重視し、「からだづくり」のメンタルな面での育成にも努めた。

なお、「認知能力」の育ちの弱い生徒には、各実践場面でできるかぎり活動量を拡げることが「からだづくり」の基底となるとも考えてきた。

こうした3年次にわたる検討を経て、高等部のからだづくりの目標を「すすんで生き生きとからだを動かす子」とした。

## 【3】研究の経過（昨年度までの取り組み）

本校の研究テーマ「発達と障害に応じた教育をめざして—からだづくりを通して—」に基づき、高等部の研究主題を第1年次「すすんで運動を楽しむ子」と設定し、生徒の実態と問題点の把握、それにとともなう、指導のあり方や内容の検討を行い、運動経験の習慣化を中心とした取り組みに重点を置いてきた。

特に、自己の健康を保持、増進させることが、運動能力の向上のみならず、集中力の向上を促進し、高等部教育の目標でもある社会的自立をより確かなものにしていく基礎的な力となると考えて研究実践を重ねてきた。

第2年次になって、研究主題を単に「運動を楽しむ」だけでなく、あらゆる場面で「すすんで生き生きとからだを動かす子」と設定し、運動場面とともに生活場面での「からだづくり」を重視した。これは、保健体育、養護・訓練をベースにした取り組みを、生活一般や職業科といった領域での実践にも拡げ、運動場面で培った力が、働く意欲や態度をも育て、社会的自立をも促すものとなることを期待した取り組みでもあった。